

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	地域保全にかかる市民活動の持続性における風土的聖性の意味
Title(English)	The meaning of 'sacredness fostered by the endemic' in the sustainability of local civic activities centering on conservation
著者(和文)	山村美保里
Author(English)	Mihori Yamamura
出典(和文)	学位:博士(工学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第12349号, 授与年月日:2023年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:齋藤 潮,猪原 健弘,真田 純子,真野 洋介,那須 聖
Citation(English)	Degree:Doctor (Engineering), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第12349号, Conferred date:2023/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第	号	学位申請者氏名	山村 美保里		
論文審査 審査員		氏名	職名		氏名	職名
	主査	齋藤 潮	教授	審査員	那須 聖	准教授
	審査員	猪原 健弘	教授			
		真田 純子	准教授			
真野 洋介		准教授				

論文審査の要旨 (2000 字程度)

本論文は「地域保全にかかる市民活動の持続性にみる風土的聖性の意味」と題し、全8章で構成されている。

第1章「序論」で、研究の背景と目的、方法と構成を示し、用語の定義、既往研究の概括と本研究の位置付けを行っている。主体に内在化されたコミュニティ単位の規範が、活動として外在化することに着目し、高度成長期前後で聖性のある環境が変化した場所への地域保全活動について、ヒアリングと資料分析を通して、風土的聖性の概念を提示し、その意味を明らかにすることを目的としている。

第2章「風土と聖性・聖なるもの」では、既往知見を精査して風土と聖性の枠組みを提示している。風土は、和辻の『風土』の目的と後続研究を整理して読み解き、存在論における時間概念の考察を追加して、本研究における風土を特定している。聖性は、日本人の信仰の特徴を整理して、事例分析における着眼点として、恵みと災いへの恐れ、定例化した祭事の遂行、場所の清浄化等を提示し、信仰対象のために行う行為を「働きかけ」としている。

第3章「縫ノ池湧水会」では、農村集落の弁財天と周囲の池に関する地域活性化活動である「湧水会」活動の持続性の要因を明らかにしている。水利用の来歴及び既存組織が、活動の誕生と展開に寄与し、季節、神事、農作業の繁忙等を考慮してイベントが行われ、慰労会等のコミュニケーションの機会が開催に関わる調整を可能としていることを明らかにしている。また活動内容を時系列で分析して、phase 1～4とコロナ禍の5期に分けて特徴を示し、環境の変化と世代の相違との相関から、発起人世代の弁財天への「働きかけ」が、活動の持続性を支えていることを示唆した。

第4章「下諏訪町湖浄連」では、御柱祭で著名な諏訪大社の神が御神渡りをする湖の、湖岸清掃をする「湖浄連」活動の持続性の要因を明らかにしている。活動が人員、資金、行政による多くの支援の集合体であり、時系列の5期の特徴から活動に毎月の清掃等の「基本的な活動」と、親子ボート教室等の「その時々活動」があること、その組み合わせが重要であること、御柱祭の慣習と次世代による目的見直しの対応が、世代継承も含めた「湖浄連」の持続性に寄与したことを明らかにしている。

第5章「古河公方公園もりもりクラブ」では、歴史上の偉人古河公方にまつわる都市公園内の、市民による雑木林管理団体「もりもりクラブ」活動の持続性を明らかにしている。公方公園独自組織のパークマスターと円卓会議の支援が、活動の誕生と展開に寄与し、会員の昔の風景をなつかしく思う気持ち、活動の持続性を支えていることを明らかにしている。経緯を5期に分けて特徴を示し、雑木林管理のルーティン化した作業が、聖性による「働きかけ」に準じた活動であるとしている。

第6章「三事例の活動の持続性の特徴」では、活動の持続性を支えている共通の特徴として、①活動場所は高度成長期前を知る発起人世代が内在化させている聖性を外在化させた場所であり、②かつての環境に近づけ保つ活動をしていること、③活動経緯に生成期、成長期、転換期、発展・安定期のパターンがあること、④いずれの活動にも「基本的な活動」と「その時々活動」があり両者の組み合わせが重要であること、⑤前者には働きかけ、楽しみ・人育て、組織運営が、後者には場所に対する活動等があること、⑥労働を共有した後の自由な会話、⑦活動場所に関する伝承や歴史を学ぶ、⑧既存組織等の活用、⑨発起人世代の環境体験、の9点を抽出している。また聖性による「働きかけ」に相当する行為が、活動の持続性を担保していることを明らかにし、その概念を「風土的聖性」として

提示している。

第7章「風土的聖性の意味」では、風土的聖性が人に内在化されるものであることを示すために、場所論の既往研究の成果を整理して、場所には視覚対象と出来事の「人によって変わらない要因」と、場所との関わりの「人によって異なる要因」があることを現わした「場所モデル」によって、人と場所との関係を構造化している。さらに風土が個人と集団との間に形成されることに着目して、事例の市民活動は「人によって異なる要因」の場所との関わりを共有するものであることを考察している。風土的聖性を「聖なるものを感じる対象に『働きかけ』に相当する行為をする性質のこと、地域社会等の他者と共に行う体験等によって個人の中に内在化され、対象に外在化されるもの」とし、地域保全活動における風土的聖性の意味として、①活動の持続性、②地域保全に有効な規範、③なつかしさと自己了解、④歴史伝承による活動の活発化、⑤異なる世代との共有、⑥人・場所との関わりの充実、の6点を考察している。

第8章「結論」では、各章で得られた成果をまとめ、今後の課題として地域保全活動における風土的聖性に関する懸念と展望を述べている。

以上要するに、本論文は既往知見の精査と市民活動の実証的分析を通じて、風土的聖性の概念と意味を提示し、非科学的とみなされる信仰行為にも現代の地域保全における合理性を有することを示したものであり、今後の価値システム専攻並びに実践的な地域保全活動に貢献するところが大きい。よって本論文は博士（工学）の学位に値すると認められる。

注意：「論文審査の要旨及び審査員」は、東工大リサーチポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。